

ゆくはし 今昔物語

来年、市制 70 周年を迎える行橋市。山や海に囲まれ、京築地域の中核として人が行き交い、歴史と文化が育まれてきました。昔懐かしい行橋の風景や町なみの、「今」と「昔」をご覧ください。

～ Vol.3 「6.30 水害」と長峡川の河川改修～

昭和 54 年 (1979) 水害で水浸しになった行事地区



昭和 54 年 (1979) 6 月 30 日。梅雨前線停滞に伴う 26 日からの長雨に加えて、30 日未明からは 8 時間で 265mm の集中豪雨に見舞われました。周防灘の満潮とも重なったことで、長峡川をはじめとした市内 4 つの河川が決壊・氾濫し、行事地区を中心とする市内中心部は水浸しとなりました。

この水害が、行橋市で今日も語り継がれる「6.30 水害」です。市内では 1 人が犠牲となり、住宅の全半壊 3 棟、床上・床下浸水 7861 棟、田畑の流出・埋没など 2,078ha、道路の被害 108 ヶ所、橋の流出 6 ヶ所など多大な被害（被害額 30 億円）が出ました。この水害では災害救助法が適用され、行橋市には福岡県や日本赤十字社をはじめ全国各地から救援物資が送られてきました。



▲工事の用地買収に伴い 123 戸の家屋が移転しました。

昭和 57 年 (1982) 津熊橋から見た下流の工事風景

水害によって大きな被害を受けた長峡川水系の復旧整備は、福岡県内で初めての「激甚災害特別対策事業（激特事業）」として実施され、昭和 56 年 (1981) 6 月に県長峡川改修事務所が開設されます。事業内容は、長峡川 11.2km、井尻川 6.2 km など合計 21.5km を対象に、川幅の拡幅、護岸整備、川底の掘削（しゅんせつ）、橋 27 ヶ所の架け替え、井堰 13 ヶ所の改修などでした。総事業費 150 億円を投じた大事業は、約 6 年の歳月をかけ、昭和 62 年 (1987) 3 月に完了しました。

令和 5 年 (2023) 津熊橋から見た現在の風景

「天災は忘れた頃にやってくる」。明治から昭和初期の科学者で随筆家でもあった寺田寅彦が、大正 12 年 (1923) の関東大震災などの経験を基に残した言葉とされます。平成 30 年 (2018) 7 月の西日本豪雨などはまだ記憶の新しいところですが、行橋の今昔を振り返る中で市民の皆さんに改めて防災意識を高めていただければ幸いです。

